

ンプである。電燈・ガス燈は供給区域外では利用できないから、個人の意思だけで採否を決められない事項である。1戸だけが行燈（あんどん）というものもある（瀧野川町）。

衣食住以外は割愛する。大正期に刊行された郡誌は多いが、このような事項が書かれている例は稀である。

記述は町村役場への照会によっているが長崎村は回答せず、南千住町は質問項目を無視して別の事を書いている。瀧野川町・赤塚村のように詳細に調査して回答している所もあるが、多くの町村は概数である。

（駒沢大学）

最近のベトナム

菊池 一雄

最初ベトナムにむかったのは1962年であった。当時ベトナムは南と北に分かれていたので政治的な意味合いで、南ベトナムのみ入国可能であった。以後ベトナム戦争の終了まで5～6回サイゴンなどの土を踏んだ。

しかしそれからしばらくベトナムに行くことが出来なくなり、やっと1987年になって、ベトナムの社会科学会の招待という形で北のハノイを中心に同国を訪れたのである。

こうしてこの国の北と南を訪れることが出来るまでには20年以上もかかってしまったわけである。

ここ何10年の間に、ベトナムは仏領、独立戦争、分断、統一等々大きな歴史的事実の連続であった。しかし地域性という点ではどうなのであろうか。

私は、はじめてこの国を訪れてから南北の特色を感じたが、それは南北に長い国、気候もちがうし、平野や山地の様子も随分違う。とくに水田をつくっている農村だけを見ても紅河とメコンのデルタの人文的相違は一見ただけですぐ気がつくほどである。今度紅河のデルタを見て驚いたのは、メコンデルタとくらべて何よりも人が多いことで、これはたしかに仏領時代の地理学者のP・グールーが驚いて研究対象にしたのも無理がないと思った。ここではいろいろの型の村が密集し、さらに古い家々をみると、昔の地主の家、貧しい農民の家などの相違もまだみられる。ただ人民公社の建設が早かった為か、旧来の家とくらべると、比較的新しい公共建物があちこちにつくられ、まだ非常に少ないはいえ近代的な農機具が導入されている。

社会主義農業の点では北と南では大体同一歩調をとっているようだが、農業方法の密度の差からくる地

域性を感じさせられた。それに広大なメコンデルタと違って、紅河デルタは余り遠くないところに約1000mのタムダオの山などがみられ、小じんまりとしているのである。

紅河にかかる橋はかつてはロンビエン橋があるのみだったが、今ではその上流にソ連の援助による新しい橋(下部には鉄道橋も併設)が出来ている。が、実用一点張りの感じである。現在のメコン川にはまだ橋はない。

ハノイの街の人口は、かつての10数万が現在250万人となっている。街としての施設は人口の膨張にともなわれない。とくに旧市街は仏領時代の儘である。ただ政庁周辺は国の独立を強く訴えている建物がある。現在のホーチミンとくらべるとハノイは質素で色々の面で対照的である。同じものと云えば外国書を並べる国営書店ぐらいで、そこではソ連色が強く、約6割ほどの書棚をしめ、英・仏の本はそれぞれ2割ずつというところだろう。

山地に住んでいる人々は、少数民族が多かったが、現在ではキン族(いわゆる越族)も住むようになり、人種的にはまったく同じである。ただ生活方法となるとその変化はきわめて徐々にしか変らない。ここにも南と北の差異を感じさせられる。

今度のベトナム訪問の印象では、昔のような南北性ではないが、社会主義国としての新しい地域性とも云うべきもの、(それは一部では古い地域性をなくしてはいるが)が感じられた。そしてまたベトナムは近くのカンボジアやタイなどとも違う独特な国なのだと思う。

（早稲田大学）